

### 前回の復習

	意味 (Bedeutung)	意義 (Sinn)
固有名 (Eigennamen)	対象	対象の与えられ方
述語	概念 (不飽和)	文の意義への貢献?
文	真理値 (真/偽)	思想 (真理値の与えられ方?)

### 練習問題：フレーゲならば、「ユニコーン」の意味をどう考えるのだろうか？

「ユニコーン」のBedeutungはないが、Sinnはあると考える。『オデュッセイア』に登場する王女ナウシカについて、フレーゲは固有名「ナウシカ」は無意味(bedeutungslos)であるが、無意義(sinnlos)ではないと述べている (Cf. 論文「意味と意義詳論」『フレーゲ著作集4』勁草書房、p. 110)。対象 (Bedeutung) がいないのに、対象の与えられ方 (意義) が与えられている場合は、他にもありえるだろう。(これはフレーゲの挙げている例ではないが)「次回のオリンピックでの100走の優勝者」はまだ対象が決まっていないが、対象の与えられ方は決まっている。

### 練習問題：フレーゲは、「タワーは建築物である」のように普通名詞が主語になるときについて、どう考えるのだろうか？

フレーゲは、論文「概念と対象について」(『フレーゲ哲学論集』岩波、p. 71)で次のように説明している。

「すべての哺乳動物は赤い血をもっている」

これは、次のように言い換えられる。

「何かが哺乳動物であるならば、それは赤い血をもっている」

$\forall x$  (xが哺乳動物である  $\rightarrow$  xは赤い血をもっている)

この文や、 $\exists x$  (xがウィーンである)の場合には、固有名が存在しない。固有名をふくまなくても、文は真理値を持ちうるとフレーゲは考えているように思われる。

「相等性記号や類似の記号の一边には決して概念の表記のみが現れることはできず、常に概念以外のなお対象が表示ないし暗示されねばならないということである」(論文「意味と意義詳論[1892-95]」『フレーゲ著作集4』勁草書房、p. 107)

対象を「表示」するのは、固有名である。対象を「暗示」する (andeutend) のは、個体変項 (変数) ではないかと思われる。例えば、 $a=b$  や  $x=x$  や  $2x=x+x$  などは真理値をもつが、あとの二つの文には、固有名がなく、個体変項がその代わりをするのではないか。

### <学生からの質問>

小林君からの質問：「 $x + 2$ 」も  $x$  が与えられていなければ不飽和なのですか？

回答：そのとおりです。「 $x + 2$ 」は一定の対象を指示しないので、固有名ではありません。したがって、不飽和です。 $x$  に 3 が代入されると、「 $3 + 2$ 」となり、これは固有名となります。

これは「3」と「2」という固有名と関数「 $( ) + ( )$ 」から合成された表現です。この関数は、不飽和であり、二つの空所に固有名が入ったときに、はじめて固有名となり対象（基数5）を指示します。

ちなみに「 $( ) + 2$ 」もまた不飽和であり、関数です。この関数は、関数「 $( ) + ( )$ 」と固有名「2」が結合して作られた関数です。

「ソクラテスの父」は固有名ですが、これは「 $( )$  の父」という関数に、固有名「ソクラテス」が結合して作られた固有名です。これは固有名ですから、さらにこの関数と結合して次の固有名を作ることが出来ます。「ソクラテスの父の父」、以下同様に反復できます。

「 $( )$  は、 $( )$  の父である」これは、不飽和の述語です。これは概念を指示 *bedeuten* します。概念とは、関数の一種で、真理値を出力する関数のことです。この述語と固有名「ソクラテス」が結合した、「ソクラテスは、 $( )$  の父である」も「 $( )$  は、ソクラテスの父である」も、まだ不飽和です。したがってこれもまた述語です。このように述語が、固有名を部分として含むことがあります。

## § 3 Davidsonの真理条件意味論

ここでは主に論文「真理と意味」野本和幸訳（デイヴィドソン『真理と解釈』勁草書房、所収、引用はこの訳書からのものである）をもとに説明したい。

### 1、デイヴィドソンの問題設定

デイヴィドソンは、「文の意味がどのように語の意味に依存するのかについての説明を与える」（邦訳p.2）ことを意味論が満たすべき課題の一つと考えている。（意味論の課題としては、もっと多くのことが要求されると思われるが、これについてはセメスターの後半で触れたい。）

この論文で彼はまずこの課題を満たすためのいくつかの提案を検討する。

**提案1** 「一つの提案は、文の各単語に対して、意味としてある存在者を割り当てるということから事を始めようというものである。例えば、「テアイテスは飛ぶ」という文中の「テアイテス」にはテアイテスを、「飛ぶ」には飛ぶという性質を割り当ててよかろう。その場合、当の文の意味がどのようにしてこれらの意味から生成するのかという問題が生じる。」(p. 2)

<テアイテス、飛ぶ>

というように、語の意味を並べても文の意味は生じない。そこで語の意味の関係を例えば<例化 *instanciating*>を加えて、

<テアイテス、例化、飛ぶ>

としても、今度はこの3つが集まって、どうして文の意味になるのか、不明である。そこで、次にその関係をまた表示したとしても、以下同様に、無限に反復しなければならない。

## 提案2：フレーゲの「不飽和」というアイデア

そこで登場するのが、述語を不飽和な表現であるとするフレーゲのアイデアである。しかし、デイヴィドソンは、これでは解決にならないという。

「フレーゲは、例えば述語に対応する存在者が名前に対応する存在者とは、対照的に、「不飽和」つまり「不完全」だということによって、この後退を回避しようとした。しかし、この学説は、困難を解決したというよりはむしろ、それに名称をつけただけのように思える。」(p. 3)

### ●フレーゲの立場からの解決案1

文の意味meaningを指示reference（フレーゲのいうBedeutung）と同一視するという戦略をとってみよう。すると、文のBedeutungは、語のBedeutungから合成される。その際に、述語のBedeutungは「関数的表現の特殊ケース」つまり変数を真理値に写像する関数（概念）とみなし、文を「複合的単称名辞の特殊ケース」つまり真理値を指示する固有名とみなす。しかし、この場合には、同意味語を代入しても、文のBedeutungは変わらないことになる。

「文の意味がその指示するものであるならば、真理値において一致するすべての文は同義synonymousでなければならない。だがこれは、法外な帰結である。」(p. 5)

例えば、「太陽は東から昇る」と「 $2 + 2 = 4$ 」がsynonymousであることになってしまう。

（デイヴィドソンは注の中で、この批判は「文が指示する存在者としてどのような特定のものを想定するかに依存しない」という。つまり文のBedeutungを真理値以外のものとして考えるとしても成り立つ批判であるという。そのとおりである。）

### ●フレーゲの立場からの解決案2

次にBedeutungとSinnの区別を考慮して、文の意味meanignをフレーゲのいう文のSinnだと考えてみよう。文のSinnを語のSinnから合成できるだろうか。

「たとえば、「テアイテトスは飛ぶ」の意味を問うてみよ。フレーゲ流の回答は次のようなものであろう。独立変項として「テアイテトス」の意味が与えられたなら、「飛ぶ」の意味は、値として「テアイテトスは飛ぶ」の意味を与える。この回答が空虚なのは、明らかである。我々は「テアイテトスは飛ぶ」の意味が何であるかを知りたかったのである。それは「テアイテトスは飛ぶ」の意味であるといわれても、何の前進にもならない。」(p. 6)

## 提案3：統語理論と辞書があれば、意味がわかるという提案。

「任意の表現についてそれが独立に有意味（つまり、文）であるか否かを教示する実効的な方法からなる、満足のいく統語理論をもっていると仮定しよう。また通例のようにこの理論は、各文を原子的な統語論的要素（おおまかには、単語）の固定された有限な持ち合わせの中の要素から、許容可能な仕方で作成されたものとみなす、ということを含んでいると想定しよう。」(p. 7)

このような統語理論があれば、それに従って〈与えられた文が有意味な文であるかどうか〉を判定できるだろう。

「楽観的な考えとは、そのように考えられた統語論は、各統語論的原子の意味を与える辞書が附加されると、意味論を提供することになるろう、というものである。しかしながら、意味論がわれわれのいみでの意味理論を含むべきならば、望みは打ち砕かれる。というのは、文の有意義性に役立つ構造的特徴についての知識プラス究極的諸部分の意味についての知識は、ある文が何を意味するかについての知識には到達しないからである。」7

この批判は、おそらく次のようなことであろうと思われる。辞書を引いて、与えられた文に用いられている語の意味を説明する表現を手に入れたとしよう。たとえば、「これはリンゴだ」という表現が、統語理論によって有意義な文であることを示せたとしよう。大きく譲歩して今仮に「これは( )だ」という表現の意味がわかっていると仮定しよう。そのとき、「リンゴ」の意味を辞書で引いたら、「バラ科の落葉高木」という説明があったとしよう。そうすると、我々は「これはリンゴだ」と「これはバラ科の落葉高木だ」という文が（おおよそ）同義だといえるかもしれない。しかし、その意味がわかっているとはいえない。その文が真であるか偽であるかもわからない。（この提案3を批判しているのは、この論文の第9段落である。しかし、以上の私の解説が適切であるかどうかについては、いまひとつ確信が持てないことを付言しておきたい。）

### 3、デイヴィドソンのアイデア

「文の諸部分は、それが現れる文の意味に体系的な貢献をする、という存在論的に中立的な意味を除いては、意味をもつということを想定しない」(p.8)とすると、「この洞察がさししめす一つの方向は、意味についてのある全体論的な (holistic) 見解である。」(p.8)

#### (M) sはpということの意味する (s means that p)

言語L中のすべての文についてこのようなM文を構成できたならば、それでLの意味論を与えられるのかもしれないが、しかしそのときには「意味する」とはどういうことであるのかの説明が残ってしまう。そこでDavidsonは、「意味する」という語を使わずに文の意味を説明しようとし、つぎのようなT文を考える。

#### (T) sがTであるのは、pの場合その場合に限る (s is T if and only if p)

ここでの「Tである」がどのような意味であるかは、まだわからない。ただ、次のように言われるだけである。

「ある言語Lに関する意味理論に我々が要求するのは、いかなる（それ以上の）意味論的観念にも訴えずに、その理論が‘s’をL中のある文の構造記述によって、かつ‘p’を当の文によって置換したときに、図式(T)からえられるすべての文を含意するにたりるだけの制約を、述語「Tである」に課すことである。」(p. 10)

しかしこのような条件「Tである」を満たす文sは、Lの真なる文であるとDavidsonはいう。

「明示的に定義されるにせよ、再帰的に特徴付けられるにせよ、述語「Tである」の適用される文が、まさにLの真なる文であることは明らかである。というのは、満足すべき意味理論に我々が貸した条件は、本質的には、真理の形式的な意味論的定義の適切性(adequacy)をテストする、タルスキの《規約T》(Convention T)だからである。」(p.10)

(タルスキがなぜ、T文によって真理を定義できると考えたのかについては、彼の論文「真理の意味論的観点と意味論の基礎」(坂本編『現代哲学基本論文集II』勁草書房)を参照のこと)

「[タルスキの真理]定義は、すべての文の真理に関する必要十分条件を与えるという働きをするのであり、また真理条件 (truth condition) を与えることは、文の意味を与える一つの仕方なのである。ある言語に関する真理の意味論的概念を知るということは、ある文——任意の文——が真であるとはどういうことかを知るということであり、そしてそのことは、実質上、その言語を理解するということに等しい。」(p. 11)

今仮に言語Lを次のように構成しよう。

#### <語彙の定義>

名前 a、b、c がある。

「a」はアキコを指す。

「b」はボブを指す。

「c」はキャサリンを指す。

述語 K、M、N がある。

「H」は、集合 {x | xは幸せだ}

「K」は、集合 {x | xは金持ちだ}

「N」は、集合 {x | xは暢気だ}

#### <文の帰納的定義>

- ① 述語の後に名前をつけたものが、文である。
- ② 文に否定記号「 $\neg$ 」をつけたものは文である。
- ③ 文と文を論理結合子  $\&$ 、 $\vee$ 、 $\rightarrow$  で結合したものは文である。
- ④ 以上によって文とされるものだけが文である。

#### <要素文のT文>

「Ha」が真である  $\text{i f f } \forall (a) \in V (F)$   
 $\text{i f f}$  名前「a」の指示する対象アキコが、  
述語「H」の指示する集合 {x | xは幸せだ} の要素である。

#### <複合文のT文>

「 $\neg p$ 」が真である  $\text{i f f}$  「p」が真でない。  
「p & q」が真である  $\text{i f f}$  「p」が真であり、かつ「q」が真である

「 $p \vee q$ 」が真である iff 「 $p$ 」が真である、あるいは「 $q$ 」が真である  
「 $p \rightarrow q$ 」が真である iff もし「 $p$ 」が真であるならば、「 $q$ 」が真である。

以上の規則から例えば、次のような文「ボブは金持ちでないが幸せだ」の意味（真理条件）を次のように語の意味から合成できる。

「 $\neg K b \& H b$ 」が真である iff 「 $\neg K b$ 」は真であり、かつ「 $H b$ 」が真である。  
「 $\neg K b$ 」が真である iff 「 $K b$ 」が真でない。  
「 $K b$ 」が真である iff ボブが金持ちの集合に属する。  
「 $H b$ 」が真である iff ボブが幸せなものの集合に属する。

真理条件意味論の説明としては、以上ではまだ不十分です。まだ根本的な欠陥が残されています。

ただし、次回は番外編として「形而上学の歴史と現在」について話します。